

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800740		
法人名	医療法人 潤幸会		
事業所名	ひまわり		
所在地	熊本県上益城郡山都町下市59番地		
自己評価作成日	平成30年10月23日	評価結果市町村受理日	平成31年3月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成31年1月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> 毎月1回ではあるが運動サポーターへ来所依頼している。又利用者の誕生日には祝いの言葉や踊りを特別に行ってもらっている。 八朔祭の時にはギャラリーより見学をしてもらい、昼食は弁当箱に入れて食事をしながら楽しんでもらっている。夜市や八朔祭は地域の人々との触れ合いの場となっている。 本年は運営推進委員会においてバスレクを利用者全員に参加で行えた。ご家族の参加もあり共に外出が出来たことを喜ばれた。今後も利用者の体調を見ながら家族と共に外出の機会を設けていきたい。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>平成15年開設したホームは、隣接する医療機関との連携や日々の健康管理により、入居者・家族の安心や信頼に繋がっている。開設当初、リビングの一角に設けられていた畳の間は、車いす利用者も多くなり、現在全体がフローリングに改修されるなど設備面の変更はあるものの、リビングに集う入居者の笑顔は変わらず、職員との方言を交えた会話からも穏やかな日常を感じる事が出来る。職員体制などの面から、以前のような近隣の散歩は減少しているが、家族や運営推進会議のメンバーも参加しての、阿蘇方面へのバスハイクは今年も実現し、秋の外出を楽しんでいる。道路に面しているギャラリーは、現在運営推進会議や八朔祭り時の見学場所としての利用が中心になっているが、今後は入居者をはじめ法人関係者、地域の人々の作品(絵画や写真他)展示会などに活用し、交流を更に深めていかれることを期待したい</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年度初めの院内教育において目標を決めて発表をしている。理念においては個々の意見や思いをまとめることが出来ないでいる。利用者へ寄り添うケアを理念として出来てばと思う	理念はホーム内に掲げ、共有と意識づけに努めている。理念の振り返りについては、現在の理念のままでいいのか、見直しの必要はないのか、カンファレンス等で話し合いをしている。ホームの年度目標は、年度初めに管理者が中心に策定し、運営推進会議でも説明するなど周知を図り、入居者のサービス向上に努めている。	理念の振り返りや年度目標の策定にあたっては、カンファレンスや朝礼等で、スタッフとの話し合いの中で作り上げていくことも大切なことと思われる。また、目標等については、運営推進会議で引き続き説明されることが期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事である夜市、祭りへの参加を行っている。毎月町の広報や回覧が回ってくる。利用者へ読んでもらっている。地域の清掃や健康教室への参加は出来ない。	地域とのつながりがある暮らしとしては、7月の夜市見学、9月の八朔祭りでのギャラリーを開放しての参加などがあり、昔馴染みや近隣の人達との声掛けや交流などもあっている。ただ、職員配置などからホーム周辺の散歩や健康教室等への参加の機会も少なくなっていると感じており、気候が暖かくなったら実施していきたいとしている。	ホーム内に、保育園児や小・中学生の年賀状が掲示しており、入居者に喜ばれている。この年賀状に返事を出すことにより、交流のきっかけづくりをされることも一案かと思われる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議において認知症の勉強会や家族の会の役員でもあるご家族へ依頼し認知症家族の会の話や町の保健だより等をもとに話をしてもらっている。年に1回勉強会として取り入れていきたいと思っている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の開催までの期間の取り組みや行事報告、入院や入所・退所の状況を報告を行い運営推進委員、家族へ意見を求めている。	運営推進会議は、2ヶ月に1回、行政、地域代表(防災関係者、区長、民生委員、福祉委員、シルバーヘルパー等)、家族と、ホーム側からは、代表と管理者が出席し開催されている。ホームの活動報告後、認知症や健康診断の勉強会、意見交換会等が行われ、双方向的な意見交換がなされていることが議事録から確認できた。	運営推進会議には、外部評価結果と改善の取組等を報告、説明したうえでサービス向上に具体的に繋げていくことが期待される。また、出席できない家族には、玄関での議事録開示など報告することも必要と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進委員会へ参加をしてもらい、活動報告を行い質問やアドバイスをもらう様に行っている。又、法人を通してであるが市町村へ質問等を行っている。	行政は、ホームで開催される運営推進会議に毎回出席し、ホームや入居者の実情を把握するとともに、会議の中で情報提供や助言等を行っている。また、ホームは、法人の事務局とともに質問、相談等を日頃から行っているほか、毎月1回は運動サポーターに来所してもらうなど、協力関係の構築に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員からのスピーチロックや日々のケアにおいて拘束と思える行為に対してはその都度注意を行っている。又カンファレンスにおいて検討し意識づけを行っている。ベッド柵使用に関しては外す努力を行っている。	職員のスピーチロックや気になる言葉遣い等はその都度注意喚起するとともに、認知症に対する理解を深めるようにしている。拘束や虐待に関する報道等をもとに意見交換や研修受講後は、カンファレンスや朝礼等でストレス対策等について話し合うなどしている。また、ベッド柵も外す努力を行い、安易にしない意識付けに努めている。感知センサーを使用するにあたっては、継続した家族への説明が望まれる。	身体拘束をしないケアの実践については、運営推進会議の中で、現状と研修状況を報告することも必要であり、その際には、居室の状況を見てもらう機会を作ることも良いと思われる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	院外研修への参加が出来ていないのが現状であるが、法人で行われる院内教育へは出来る限り参加をするようスタッフへ声掛けを行っている。参加できない場合は資料を掲示し読んでもらうよう促している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	院内教育で学ぶ機会はある。参加出来ないスタッフへは資料を掲示し読んでもらう様声を掛けている。 院外の研修等への希望が少なくその都度参加の声掛けを行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には約款説明を行い、質問等も受け十分に理解をもらい契約を交わしている。退所時も家族と話す機会を設けている。改定があった場合は法人より手紙で知らせ直接説明会などを開催している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見箱を設置しているが最近では直接ご意見を頂くことが多い。ご意見に対しては真摯に受け止めている。またカンファレンスで伝え改善出来る事やケアの変更等を決めている	入居者の意見、要望等は、普段の生活の関わりの中で聞くようにしている。家族については、面会時に状況報告をする中で尋ねたりしているほか、意見箱の設置や、運営推進会議に参加してもらい、他の会議メンバーに意見、要望等を伝えられる機会を作っている。出された意見、要望等については、カンファレンス等で話し合い改善につなげている。	入居者、家族等からの苦情、要望等については、受付、内容、対応経過、改善結果等を記録したものを作成し、運営推進会議で説明されることも必要と思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員はカンファレンスの際自分の担当の利用者がより良い環境で生活出来るよう意見を出すことが出来る。又業務上必要と思われる備品の購入が出来ている。	運営に関する職員からの意見や提案は、月1回のカンファレンスで確認しており、話しやすい雰囲気づくりに努めている。カンファレンス以外では、日常業務の中で随時聞いており、勤務形態の変更等個別に相談があれば、可能な限り対応している。物品等の購入にあたっては、入居者の暮らしを優先して考えるとともに、経年劣化したもの等を優先的に検討し購入している。最近では、食器乾燥機を購入等職員の意見、提案等を反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員のそれぞれの能力に応じた係決めを行い、責任をもって仕事をしてもらっている。管理者は補助者としてアドバイスをを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修案内等を貼り出し希望を募っているがなかなか参加出来ないのが実情である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会への参加が最近出来ていないのが実情である。出来る限り参加し情報の交換を行いたいと思っている。またスタッフが参加出来るように勤務の調整を行いたいと思う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に情報提供や施設訪問等で情報を得て状況の把握に努めている。また家族や本人の要望へは真摯に向き合い出来る事出来ない事を伝えている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談時には一度施設見学をして頂きありのままを見て頂くことで安心してもらう。面談時家族が困っていることを聞き取り、入居後も会話の機会を多く持ち信頼関係を築くように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	情報提供書や家族よりの聞き取りで必要なサービス等を見極めている。リハビリが必要であれば併設の病院のPTへ相談している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者が高齢となられ出来る事が限られてきているが残存能力を生かし簡単な洗濯物たたみや下膳、新聞紙たたみ等を行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月担当職員が近況を報告している。面会時には日頃の様子をお話し安心してもらっている。外出や外泊の支援も行っている。家族が会話をする共通の話題を提供してもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出が出来る入居者は家族と共に出かけたり、面会時には居室でお茶やお菓子を食べながら過ごせる。またギャラリーで共に過ごせる様に開放している	馴染みの場所への外出としての盆、正月の帰宅や初詣等、少なくなってきた。家族等の面会時には、居室でお茶を飲みながらゆっくり過ごしてもらうなど関係が継続するよう支援している。裁縫等の趣味、特技や、コーヒー等の好み、こだわりについても継続できるように支援している。	今後は入居者にとって昔馴染みのおやつ(団子や寒天など)を手作りすることも、一考かと思われる。食への楽しみも広がることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	昔馴染みの入居者同士が同じソファに腰かけ会話できるようにしている。また気の合わない入居者同士がトラブルにならないようスタッフが気を付けている		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院により退所された人の面会や家族の方と町内で会った時でも気軽に声掛けを行い関係性を継続している。またスタッフ間で情報を共有している		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	それぞれの生活スタイルを尊重しながらも常に遠くから見守り声掛けを行っている。本人だけでなくご家族から聞き取りを行い意向に添えるように努めている。	職員は担当制をとっており、日々の関わりの中で、入居者の一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向を把握できるように努めている。また、面会時や電話等で家族から話を聞き、カンファレンス等で情報を共有しながら、本人の思いに沿えるよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケアマネや施設よりの情報提供書、家族より情報を得て入居前には職員は生活歴や生活環境等の情報の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	情報提供書で得た情報だけでなく日々の生活の中で出来る事、出来ない事を見極めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族よりの要望に対して出来る事、出来ない事を見極め、日々の支援の中での気づきをカンファレンスしている。家族の意向に出来る限り添うようにしている	日常の関わりや会話等の中から、入居者や家族の思いや意向をくみ取り、カンファレンスを行いながら、プランを作成している。プランは6ヶ月毎に見直すこととしており、モニタリングの実施に努めている。家族への説明は、わかりやすく進めるなど工夫しており、場合によっては、後で手紙で意向を確認するなど丁寧な進め方に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録の他、申し送り、チェック表に記載し職員は情報の共有をしている。またケアカンファレンスにて再度確認を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々ニーズに対しての対応は柔軟に対応できるよう職員間で情報の共有を行い支援している。グループホームだけに収まらず法人内のサービスを利用することもある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	定期的な運動サポーター来所、併設施設で幼稚園児による太鼓演奏やボランティアによる催し、夜市や八朔祭見物、年1回のバスレク等は家族や運営推進委員の協力により参加を楽しまれている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の変更時には前医よりの情報提供を依頼し継続した治療が受けられる様にしている。また他科受診を希望された場合必要時にはスタッフが付き添う様にしている。	もともと協力医療機関を受診されていた方も多く、全員がかかりつけ医として、定期受診を支援している。隣接する協力医の存在や看護師との連携は家族や職員にとっても心強いものとなっている。専門医などの受診については、家族に依頼しているがホームでも柔軟に応じている。食後の歯磨きや義歯の管理など口腔ケアに努めており、今後は個々に応じて訪問歯科への対応にも取り組みたいとしている。	今後も入居時には本人・家族の意向を十分把握し、受診支援など家族と検討する機会を持たれる事を期待したい。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	異常を認めた場合は看護職へ報告をしてもらっている。また受診日には気付いた事を必ず伝えるようにしている。法人内の看護職との連携をとり受診に繋げている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には情報提供を行い、入院中の経過を尋ねるようにしている。スタッフは面会に行き現在の状況や退院の時期等の情報を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	グループホームでの生活が出来ない様な重篤な状況が予測される場合は主治医より家族へ説明が行われる。その時に家族の意向を確認している。	入居時に現在の体制では看取りが出来ないため、できる支援に努め、母体医療機関への入院としていることを伝えている。急変時の対応などについては法人内研修で学んでおり、病院とは24時間連携が図られている。近々開催される看取りに関する外部研修に、管理者が参加予定である。	外部研修への参加が予定されており、その後の復講では、高齢の入居者を支える事業所としての役割など改めて共有の機会とされることを期待したい。また、重度化や終末期支援について、家族の思う看取り支援について職員と話し合う機会を持つことも必要と思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	院内勉強会において学んでいる。また緊急時や急変においては24時間体制で併設の病院と連携が取れる体制が出来ている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人全体で年2回、夜間・昼間想定し訓練を行っている。地域の方にも緊急連絡が出来るよう協力してもらっている。	法人全体で年2回の避難訓練を防災機器業者も参加し実施しており、うち1回は消防署の参加が得られている。近隣・地域の参加による訓練には至っていないが、緊急連絡については、協力が得られている。災害備蓄は法人で備えており、リストはホームでも確認している。	今後は近隣の方や家族にも訓練への参加を呼びかけ、意見を受けることも良いと思われる。自然災害についても風化させることなく、机上訓練や勉強会の開催に期待したい。また、コンセントの埃については、特に荷物の多い居室も見られ、定期的に確認されることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄時のケアは穏やかに声を掛け失敗に対して責めるような言動がないように配慮を行っている。下着の汚染時も居室やトイレへ誘導し更衣を行い、オムツ交換やトイレ使用時は入り口の戸を閉める様にしている。	プライバシーに配慮した排泄支援や、方言を交えながらも失礼にならない言葉使いなどについて共有を図っている。このことについて管理者はまだ不十分な点もあると語っている。起床時の整容や季節に応じた衣服の着用、定期的な訪問カットの支援など身だしなみについても、入居者の希望に応じて支援している。	居室へ入る際は在室の有無に関わらず、ノックや声掛けの徹底が必要と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃より利用者との会話の機会を多く持ち利用者の思いを知るきっかけとなるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スタッフは常に穏やかに過ごす様に心がけている。作業の手を休め必要なケアを行ったり、時には傍らで話をしたりテレビを見たりしている。午睡の声掛けを行い体を休めてもらうこともある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	担当職員は衣替えを行い季節に応じた服を準備する。2ヶ月に1回訪問で髪を切ってもらっている。馴染みの美容室の利用も希望があれば利用できる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事後のテーブル拭きや使用した自身のカップを下げる等簡単な事は出来るが共に食事を作る事は行っていない。栄養科より行事食を提供してもらっている。職員が漬けたお漬物や梅干しを食べてもらっている。	朝食と米飯をホームで調理し、他の食事は法人栄養課で調理されたものを提供している。工夫された行事食は楽しみの一つであり、特に冬場の誕生会メニューでは、刺身を使った握りずしは好評である。入居者が調理に関わる機会はないが、テーブル拭きや簡単な下膳などに取り組まれている。職員は1名が同じものを撮っているが、感想などを記録に残すことはされていない。	献立作成や調理は法人栄養課で行われているが、簡単なおやつ作りなど入居者が楽しみながら食へ関わる機会を持たれることを期待したい。また、同じものを1名の職員が撮っており、味や量、入居者の感想なども含めて記録に残し、栄養課と共有されることも必要と思われる。今後の取組に期待したい。また、エプロンの使用については、今後も首に負担のない使用方法やメニューによっては、タオルなどで対応できないかなど、その時々で検討されることを望みたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	嚥下や咀嚼状況に応じ食種や量を栄養科へ相談し提供している。新規入居者がコーヒーを好まれるとの家族からのコメントがあり他の入居者へも好みを聴き提供するようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に義歯の洗浄、嗽や口腔内を拭く等介助を行っている。可能な方は自身で行ってもらっている。夜間は洗浄剤に浸け清潔が保てるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人に合わせた排泄用品を使用し安易にオムツへ変更をしない様にしてている。夜間帯にポータブル使用される方でも日中はトイレを使用されている。	安易にオムツに頼らない支援に努め、個々に合わせた排泄用品を検討している。殆どの方がリハビリパンツであるが、布パンツで自立された方、身体状況からテープ式オムツの方もおられる。夜間のみポータブルトイレを使用される方も数名おられる。使用しない日中は、部屋の隅へ移動するなど、プライバシーに配慮している。	オムツの漏れをはじめ排泄の失敗は、個々の尊厳を失うものであり、今後も個々に応じた声掛け・誘導、心地よいオムツ交換などを共有されることを期待したい。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	チェック表の中に排便状況を記載する項目を設けている。殆どの方が下剤を使用されており排便状況に応じ調整している。毎食時10時、15時、19時の水分補給を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の曜日は決めているが行事等に合わせ曜日や時間帯の変更をしている。拒否のある方へはタイミングを見計らいながら声掛けを行っている。ゆず湯や菖蒲湯も楽しんでもらっている。	浴槽が深いため安全面に配慮しながら、週2回の入浴支援を実施し、車いすの方にはシャワー浴で対応している。拒否の方へはタイミングや声掛け・誘導を工夫しながら支援している。菖蒲や柚子の季節湯は継続して支援している。	現在車いすの方は、シャワー浴での対応となっているが、可能であれば湯舟に浸かってもらいたいことも語っている。毎回でなくとも職員体制により実現できることを期待したい。また、浴室内の環境整備については、不要なものはないかなど、定期的な見直しの機会を持たれることを期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その人その人の生活スタイルを尊重しながら孤立されないように声掛けを行っている。シーツ交換や天気の良い日には布団を干		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書をファイルしスタッフはいつでも見る事が出来るようにしている。処方を受けた薬は日付、服薬時間、記名をしており与薬時は二人で確認している。受診時に主治医へ症状等を伝えている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日昼食前に体操、童謡や季節の歌を歌っている。脳トレ体操では笑いが起きる。テレビも時代劇や歌番組等入居者が選択できる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族と共に外泊や外出は自由に出来る。年に1回は運営推進会議時にバスレクを計画し家族や運営推進委員の協力で行っている。	ドライブを兼ねて隣町への花見(桜・芝桜)や、地域で開催された菊花展に出かけている。家族の協力としては受診や散髪の他、地域の夜市や八朔祭りを一緒に楽しめる家族もおられる。また、恒例となったミルク牧場へのドライブ外出は、家族や運営推進メンバーの参加も得られており、昼食は牧場の弁当やキザミ食の方にはホームで準備するなど個々応じた食事以外出を楽しめるよう取り組んでいる。職員体制から以前のように季節や天候に応じた近隣の散歩の機会は、減少している。	感染症の時期や寒さも和らげば、地域神社への初詣に代わる参拝の機会も入居者にとって楽しみな外出に繋がると思われる。また、以前のような入居者全員での散歩は困難であると思われるが、歩行や車いすを使用し個別支援での外出に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自身で管理が出来る利用者は家族と金額を確認したうえで所持してもらっている。他の利用者のお金の管理は管理者が行い、面会時に残高の確認をしてもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族よりの手紙はスタッフが代読したり、電話も家族、利用者どちらからでも電話を掛会話をすることが出来るよう体制を整えている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	各部屋には温度計を設置し温度管理を行っている。季節の花を持ち寄り玄関に飾る様になっている。共有スペースに生花を置く事で不快感を表す利用者があり、家族よりのプレゼントの造花の花籠を飾っている。	玄関には職員の持ち寄った季節の花を飾るようにしている。入居者は食事やテレビ視聴など日中の殆どをリビング食堂で過ごされており、ソファはテレビが見やすい位置に置かれ、座席も入居者同士の相性などで自ずと決まっているようである。小・中学生から届いた賀状もリビングに掲示され、心和むものとなっている。ギャラリーは以前、雛段飾りを展示し、地域の方々にも足を運んでもらったり、道路から見学されるなど開放されていたが、現在は、八朔祭りの見学や運営推進会議の会場としての使用が中心となっている。	現在、共有空間に季節の草花などを飾ることは、入居者の不穩に繋がるなどから控えている。今後はそれに代わり季節の壁面など入居者の楽しみ事として一緒に制作され掲示することも良いと思われる。取組に期待したい。また、ギャラリーについても、作品の展示会など地域との交流に繋がる取組が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う利用者がいつも隣同士に座り、安心出来るようにしている。時折入居者同士で「こっちにきなっせ」と声かけあう姿を見る事が出来る。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には新しく購入するのではなく今まで自宅で使い慣れた布団や枕、衣類等をもって来てもらっている。新規入居者より希望があり冷蔵庫とテレビを設置した。	居室への持ち込みや準備品について、新たに購入の必要はなく、これまで使われていたものが安心されることを伝えている。直近ではテレビや冷蔵庫を持ち込まれ、テレビの視聴はあまりないが、冷蔵庫には好みの漬物などを入れられており、それらがあることで安心されるようである。居室には、押入れとタンスの設置をはじめ、必要に応じて収納ケースが持ち込まれている。家族にも衣替え時の持ち帰りや衣類・寝具の損傷確認を依頼しているが、持ち帰りが殆どないため、荷物が比較的多い環境となっている。	居室環境の一つとして、エアコンの温度設定については、今後も個々に応じて定期的に確認されることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	車椅子や歩行車等それぞれ移動手段があり整備等も定期的に行っている。移動がスムーズに行えるよう環境整備を行い安全に過ごせる様にしている。		